三位一体主日礼拝説教 「よい知らせがあります」

日本基督教団石神井教会　2019年6月16日

【旧約聖書日課】出エジプト記　19章3～8節

3モーセが神のもとに登って行くと、山から主は彼に語りかけて言われた。
「ヤコブの家にこのように語り、イスラエルの人々に告げなさい。
4 あなたたちは見た、わたしがエジプト人にしたこと、
また、あなたたちを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを。
5 今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば
あなたたちはすべての民の間にあって、わたしの宝となる。
世界はすべてわたしのものである。
6 あなたたちは、わたしにとって、祭司の王国、聖なる国民となる。
これが、イスラエルの人々に語るべき言葉である。」
7モーセは戻って、民の長老たちを呼び集め、主が命じられた言葉をすべて彼らの前で語った。8民は皆、一斉に答えて、「わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います」と言った。

【使徒書日課】使徒言行録　2章22～36節

「22イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既に知っているとおりです。23このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。24しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。25ダビデは、イエスについてこう言っています。
『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。
主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。
26 だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。
体も希望のうちに生きるであろう。
27 あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、
あなたの聖なる者を、朽ち果てるままにしておかれない。
28 あなたは、命に至る道をわたしに示し、
御前にいるわたしを喜びで満たしてくださる。』
29兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。30ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。31そして、キリストの復活について前もって知り、
『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』

と語りました。32神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。33それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。34ダビデは天に昇りませんでしたが、彼自身こう言っています。

『主は、わたしの主にお告げになった。「わたしの右の座に着け。
35 わたしがあなたの敵をあなたの足台とするときまで。」』
36だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

【福音書日課】ルカによる福音書　10章17～24節

17七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」18イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。19蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。20しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

《律法授与》から《聖霊授与》へ

子どもたちと共に祝った礼拝で、礼拝堂を「赤」で埋め尽くした「ペンテコステ」から一週間。一階には名残惜しんで少しの飾りを残しましたが、礼拝堂からは「赤」が取り外され、今日は「三位一体主日」を示す「白」の掛布に替えられました。来週からは「緑」の掛布が掛けられます。けれども、聖書日課は、もうしばらく続けてペンテコステの日の出来事に目を向けるように、わたしたちに語りかけています。

使徒書日課（使徒 2 章）は、ペンテコステ（五旬祭）の聖霊降臨の出来事を経験した弟子たちが、神殿の境内に立ち、祭りに集まってきていた人々に語り始めたときのこと、弟子のペトロが語った説教の後半を伝えています。

そのとき彼らに対しては「新しいぶどう酒に酔っているのだ」（13 節）と言う者がありましたので、ペトロは説教を、「今は朝の九時ですから…酒に酔っているのではありません」（15 節）と弁解することから始めています。多くの巡礼者がエルサレムに集まってきている祭りの最中のことでしたから、きっと、夜通し酒を飲んでいるような者もいたのでしょう。ペトロたちも、前の晩の食卓で飲んでいたかもしれません（彼らは決して禁酒主義者ではありませんでした）。

このようなことがわざわざ物語られているのは、このときがまさに「五旬祭（ペンテコステ）」と呼ばれるユダヤ人にとっての祭りの最中であったということを思い起こさせるためであったかもしれません。「五旬祭」は、イスラエルの民がモーセを指導者としてエジプトから導き出されたとき、五十日目にシナイ山に辿り着き、そこでモーセを通して「律法（トーラー）」を授けられたことを記念する祭りでした。《律法授与》を記念する祭りのときに、弟子たちの教会は《聖霊授与》の経験をした。それが、使徒言行録の伝えるところなのです。

聖霊を注がれて語り始める

旧約日課（出エジプト 19 章）は、まさにその《律法授与》の出来事を伝えています。イスラエルの人々は、モーセを通して《律法》を与えられました。彼らは、モーセと共にシナイ山のふもとまで来ていましたが、山の頂上に登ったのはモーセだけで、モーセがそこに降って来られた主なる神の御言葉を聞き、間接的にイスラエルの人々に伝えたのです。それゆえ、イスラエルの人々は、後々それを《モーセの律法》とも呼びました。それでも、彼らは、モーセを通して聴いた主の言葉に応じて、「**わたしたちは、主が語られたことをすべて、行います**」と誓って言ったといいます。そして、この《律法授与》の出来事を記念して、「七週の祭り」、ギリシア語で「ペンテコステ」すなわち「五旬祭」を祝い続けたのです。この祝いを続けた彼らにとって大切なことは、神から《律法》を与えられた民として、それを守り行うことだったはずです。

その「五旬祭」の祝いのとき、主イエスのご復活を信じて集まっていた弟子たちは、他のユダヤ人たちと同様に、《律法》を神から与えられたことを記念していました。その弟子たちが、他のユダヤ人たちとは違う行動を始めたのです。彼らは、語り始めたのです。「**神の偉大な業**」（11 節）を語り始めた。それが、《聖霊》を与えられた経験をした弟子たちの行動でした。

聖霊を注がれた者は、預言し、語り始める。それが、ペトロたちがまずはっきりと示したことです。ペトロ自身、ここでの説教の初めに、預言者ヨエルの預言を引用して、そのことを示しています（16~18 節）。大切なことは、ペトロがヨエルの預言を引いて、この聖霊が「**すべての人**」に注がれるときがきたのだとしていることでしょう。聖霊は、それを祈り求めた人にだけ与えられるのでないし、特定の能力や資格のある人にだけ与えられるのでもない。主イエスが「**神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださ**」ったので、この主イエスを信じる者には無条件で聖霊が注がれるのだと、ペトロは教えたのです。

かつて《律法》は、モーセを通してイスラエルの人々に与えられました。《聖霊》は、主イエスを通してすべての弟子たちに与えられました。わたしたちも、その聖霊を与えられている一人ひとりです。たとえその自覚が無くても、主イエスの御名によって集められた教会に連なる者は皆、すでに聖霊を注がれている一人ひとりです。そして、この聖霊を注がれている一人ひとりは皆、ペトロらのように、預言して神の御業を語り始める者にされているのです。

聖霊を注がれて、神の御言葉を語り始める者にされている。そのように言われると抵抗を感じる方もあるかもしれません。「いえいえ、わたしたちは主の御言葉を聞いて行いますが、語るのは牧師や選ばれた人だけにしておいてください」と、謙虚にも（？）おっしゃられる方が、きっとあるでしょう。けれども、もしもそうおっしゃられるならば、その人は、かつてモーセを通して《律法》を与えられたイスラエルの民と変わりません。実際には彼らイスラエルの民は、「御言葉」を聞くには聞くが、行うことにおいて散々失敗した人々でした。その人々と変わらない者のままで良いのでしょうか。

「あなたがたの名が天に書き記されている」

もちろん、わたしたちは、「御言葉を聞いて行います」とたとえ誓ったとしても、それをまっとうして合格点をいただける者ではないかもしれません。聞くことに遅く、行うことにおいても間違いを犯します。「そんな者が、主の御言葉を人様に語って聞かせるなど、とてもできない」との思いを持つのも当然です。

けれども、ペトロたちは語り始めました。主の御言葉を語り、神の御業を大胆に宣べ始めたのです。それは、彼らがいまや「聖書検定試験」に合格して主の御言葉を的確に聞くことができるようになり、また「クリスチャン検定試験」にも合格して間違いなく御言葉の教えを行うことができるようになったから、でしょうか。そうではなかったはずです。少なくとも、このときには、まだ彼らは、とても合格点を取ったと胸を張れるところにいませんでした。つい先日、彼らは主イエスの教えを離れ、主イエスを見捨てて、散り散りになったばかりでした。ご復活の主イエスに出会って再び一つに集まって来てはいましたが、ほんの数週間で合格点を得られるように変わったということはなかったでしょう。少なくとも、福音書や使徒言行録には、そのような弟子たちの変化は伝えられていません。彼らはただ、ご復活の主イエスのゆえに再び一つに集められていた、それゆえに一つになって約束の聖霊を待ち祈っていた。それだけでした。

にもかかわらず、ペトロらは語り始めました。主の御言葉を語り始め、神の御業を大胆に宣べ始めたのです。聖霊が与えられたからです。聖霊の与えられことを信じたからです。聖霊を与えられるという約束を信じて、一人ひとり互いの上に聖霊が注がれたことを信じた。「あなたにも約束の聖霊が注がれています」と互いに確かめ合い、励まし合ったとき、弟子たちは皆、主の御言葉を語り始めることができたのです。

それは、主イエスが弟子たちに期待し、望んでくださっていたことだったのではないでしょうか。かつて主イエスは、十二人を選んで「使徒」とお呼びになり、ご自分の権能を授けて宣教へとお遣わしになられました。さらに七十二人の弟子たちも同じように、宣教へとお遣わしになられました。主イエスは、弟子たちが主の御言葉を語ることを通して、御業を行う者にもなるように、お遣わしくださったのです。そのような宣教の道へと遣わされた弟子たちに対して、今日の福音書日課（ルカ 10 章）で主イエスは、「**あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい**」とおっしゃってくださいました。

「天に名が書き記されている」。畏れ多いことに、天の御父と、その右に上げられた御子イエスの、その御名に並んで、わたしたちの名が記されているのです。しかし、「聖霊」が与えられているのならば、それも当然のことです。素直に喜んでよいのです。聖霊を授けられた者として、「御父・御子・聖霊」の御名によって、主の御言葉を語ってよいのです。主は、御言葉をわたしたちの口に授けてくださるはずです。御言葉を語るわたしたちの手足に、御業を行なわせてくださるはずです。わたしたちにはできなくても、「神が」そうしてくださるのです。これは、よい知らせです。語らずにいられない、よい知らせなのです。